

# 中国80後生まれ女性の進学選択のプロセスについて

## 親の性別役割分業意識の視点から

田 媛\*

### “80后”中国女性の大学专业选择过程

#### 从家长的性别分工意识影响的观点进行的考察

田 媛 (TIAN Yuan)

#### 【内容提要】

作为改革开放社会背景下成长起来的第一代独生子女，80后人群一直备受社会关注。青年期是价值观形成的重要时期，也是性别分工意识生成的温床。80后在选择大学时遇到的家长的介入与自身选择的权衡，是否会与性别分工意识相互影响。此时，他们又是如何通过双方的协商最终在选定学校问题上达成一致的。本研究通过对80后女性的访谈进行分析，发现家长与本人的性别分工意识影响学校所在地与专业选择的同时，让她们更倾向于选择文科的专业和离家近的学校。大学的学科选择在潜移默化之间对女性的性别分工意识造成影响。

关键词：升学选择、性别分工意识、80后、女性

#### 1. 研究背景

現在の中国では、高等教育を受けることは、将来のキャリアを左右する重要な要因の一つである（徐 2005）。高校生の進路選択に影響する要因については、社会学の研究が多数存在し、その中では自身の学力など学生自身の意識的要因と、家庭の経済力など、家族や社会構造による社会資源要因がよく挙げられている。また、心理、意識的要因について、中国の研究では、「高校生の進学希望」が高校生の進路選択に重大な影響をもたらしていることがわかっている（徐 2005）。中国のセンター試験（高考）は日本と異なり、その政策は毎年省によって調整があるが、主として以下の内容で構成されている。高考は一年に一回行われており、受験後、各自にその点数が通知される。受験者は各大学が過去に発表した合格ラインを参考にし、志望大学及び志望専攻を、インターネットの専用サイトを通して教育機関に出願する。各大学が当年の合格ラインを発表し、出願した学生の中で合格ラインに達した学生を合格とする。すべての志望校に合格しなかった学生は、大学に進学する意思があれば、一年間浪人し、来年の高考に参加するしか方法はない。2000年から省によって試験の内容が異なったり、学校によって独自の入学試験がもうけられたり、政策の変動があったりしたが、高考は大学へ進学するための唯一のルートとして変わりが無い。中国では、日本と同じように高校生の時に、文系と理系の選択を行う。文系は文系、理系は理系の大学専攻に進学すると想像できるが、実際、人文社会類の文系専門は文理とも受験できるため、高校までは理系であったが、大学に進学する際に文系に転向するケースが男性より女性によく見られる（劉ら 2017）。また、文系か理系を選んだ後に、成績によって高校在学中に文理を転向するケースもあるため、女性の進学選択における一連の意識の変化をつかむ際に、高校時の文理選択は大学進学の際の専攻選択に至るまで一つの可変な過程とも言える。よって、本研究では、女性の進学時の専攻選択を切口に、高校時の文理選択も視野に入れながら分析を行う。進学というイベントがよく見られるのは青年期であり、その上、青年期の性別役割分業意識

---

キーワード：進学選択、性別役割分業意識、80後、女性

\*平成26年度生 ジェンダー学際研究専攻

はこれから変化する可能性を持つ意識の土台であって、「クリティカルな位置づけにある」（長尾 2008）と指摘される。性別役割分業意識の影響で、高校時の文理選択では女性は文系、男性は理系を選択する傾向が続いている（馬 2016）。ここから性別役割分業意識と進学選択との関係性を明らかにすることの重要性がうかがえる。姜（2009）は性別役割意識の社会化の過程において、大学では性別に対する認識の男女差異が強化されるが、高校まででは、激しい進学戦争の中で性別役割意識が量される時期となると指摘する。進学選択をする際に高校生本人の性別役割分業意識が量されたとしたら、この時期の文理の選択はどのように他者の性別役割分業意識に影響されたのかを確認する必要があると考える。

子どもは自分の進路について、自ら親に相談する傾向がある（鹿内 2013）。大学専攻を選択するには親からの影響が、親戚や先生、知人からの影響より大きい（樊 2011）。パーソンズ（2001）が、家族の基本的な役割の一つは子どもの社会化であると挙げているように、子どもの社会化の過程において、家族は重要な役割を果たしている。その社会化の一環として、性別役割分業意識は、家族形態（徐 2010、王ら 2014）、母親の就業経験（佐野 2007）の影響を受けている。つまり、子どもの進路選択の関連要因を検討する際に、家族からの影響は欠かせない重要な一因である。本論文も親の影響に注目する。

多子多福（子どもの人数が多いほど、幸福が多い）との伝統文化を持つ中国の中で、初代の政策の下での一人っ子である80後生まれは、初めて直面する問題が多い。この一人っ子世代の進学、結婚、遺産の相続、親の介護まで、本人たちのライフステージが進むにつれ、その都度、新しい社会問題が生じ、注目を集めていた。従来は、大家族で数人の子どもを持つ家庭が主流であったが、政策の影響で一人っ子の子どもが育つことになった。そして、改革開放の社会背景で成長した一人っ子である80後生れとその家族の間に、新たな家族関係の特徴が見られた。80後生まれの若者は、唯一の子どもとして、大事に育てられてきた。また、両親から全面的なサポートを受け、両親への依存度が高いことなどがよく挙げられている（胡 2010）。

本研究では、これらの80後生まれの特徴を考慮し、進学選択の関連要因を考察する。80後生まれに関する定義は多数あるが、本研究では、魏（2009）の1978年から1989年までの間に生まれた中国人であるとの定義を採用する。

先行研究から見られた80後生まれの意識的な傾向として、自己中心的であり、わがままであり、責任感が欠如し（黄ら 2009）、反逆心理を持ち（姜 2007）、価値観が多様化（李2008）していることが明らかにされている。自己中心的かつ反逆的であると言われている80後生まれが、どのように家族に影響され、自分の意識と家族の希望を調和させながら、進路（本研究では、大学を選択することを指す）選択をするのかの過程を明らかにすることは、女性の進路選択の過程を解明するために重要である。

したがって、本研究の目的は、親の性別役割分業意識は若年女性が進学（大学）選択をする際にどのように影響するか、その過程を明らかにすることである。そして、女性がどのように家族の期待と自身の志望のバランスをとりながら進学選択をしたのかの過程を検討する。これにより、進学時における親の性別役割分業意識からの一連の影響を把握でき、女性が親との相互作用の中でどのように進学選択を行ったかのプロセスを明らかにできると考える。

## 2. 先行研究

本研究の目的に沿って、女性の性別役割分業意識の変化、家族の性別役割分業意識の若年女性の意識への影響、性別役割分業意識と進学選択との関係を軸に先行研究を概観していく。

近年、中国では若年女性の性別役割分業意識に変化が見られている。主な変化として、女性の性別役割分業意識が保守化していることが挙げられている（徐 2010）。80後生れ女性の性別役割分業意識が社会化する過程について、姜（2009）はそれを幼児から小学校低学年、小学校高学年から中学校、高校、大学の四つの段階に分け、論じた。姜（2009）によると、幼児から小学校低学年では、教育過程で性別による差異を最小化にし、性別の差異のない「中性教育」（男女平等教育）が続いた。小学校高学年から中学校の段階では、青春期の到来による性別の差異についての意識が芽生えるが、その後の高校の段階では、進学という目標の重要さが強調されるあまり、性別役割分業意識が量された。この段階では、勉強の成績と将来の抱負について男女とも同じように期待さ

れ、進学することは最も重要な任務であるため、女らしさについての期待は二の次になった。左（2007）の武漢市の高校生を対象とした調査でも、9割ほどの女子学生が非伝統的役割分業意識を持っていることが明らかにされている。しかし、大学に進学すると、進学戦争が終了し成績は最も重要な期待でなくなり、成績のほか、周囲から女性らしさの期待が強まり、大学生段階では性別意識が強化された。この過程では、成績や将来のキャリアが要求されると同時に、伝統的な性別役割意識の女性らしさが求められる。80後生まれの中で「役割矛盾」が生じ、性別役割分業意識の変化につながると考えられる（姜 2009）。先行研究から、女性の性別役割分業意識が大学進学に伴い、変化し保守化する傾向があるとわかる。その主な理由は、大学入学後の性別役割分業意識の変化が学習のストレスからの解放と、周囲からの女性らしさの期待、つまり、日常的な学校生活の中の伝統的な役割分業意識の影響にあると説いた。

両親の性別役割分業意識が子どもへ及ぼす影響について、左（2013）は中国の青年5709名を対象に質問紙調査を行った。その結果、青少年期の子供の性別役割分業意識に、正の相関関係が見られた。すなわち、親が伝統的な性別役割分業意識を持つほど、子供も伝統的な性別役割分業意識を持つことが示された。進学選択をする際に、女性のほうが男性より家族からの影響を受けやすく（樊 2011）、日本の研究では女性に対し、周囲の性別役割分業意識に基づいた意見が女性の理系への進学を阻害する影響が見られた（河野ら 2014）。また、張（2009）が2006年に中学生と高校生を対象に行った調査結果では、性別役割分業意識は一人っ子の方が両親からの影響が強いことがわかった。さらに、両親の家事における役割分担は「夫は外、妻は内」のような伝統的な役割分業意識に従っていることが確認されたが、これに反して子どもは平等的な家庭内役割を望んでいると指摘されている。このことから、子どもは両親の性別役割分業意識の影響を受けつつも、伝統的な役割分業意識に良い印象を持っていないため、両親の意識をそのまま受け取ることは難しいことがわかる。しかし、子どもが親と自身の意識を調和する過程についてはいずれの研究でもあまり言及されてない。

性別役割分業意識と進路選択の関連性については結果が分かれている。中村（2014）の研究では、中学3年時、高校3年時、現在（大学）の3時点における希望ライフコースを分析した結果、高3時において進路展望には性別役割分業意識は影響していないが、将来展望には影響を与えていると指摘する。神林（2000）の高校生女子のアスピレーションの規定要因における研究では、学校及び家庭要因は高校生女子の教育アスピレーションに影響し、また、就業キャリア希望に影響するが、性別役割意識には影響していなかった。性別役割意識とアスピレーションの関係は疑似相関である可能性があると指摘している。河野ら（2014）によれば、学力や科学への関心の程度は性別によって変わらないが、学校や家庭での伝統的な性別役割分業意識に基づいた意見や、女性が理系を選択することに対するネガティブな見解が、女性の理系への関心を低下させると論じた。馬ら（2016）の中国全国範囲の調査における男女性の進学選択における比較研究では、男性と女性の進学時の選択における差異を明らかにした。この研究によれば、高校時に、女性より男性のほうが理系に進む傾向が見られ、大学進学時にも理系の専攻に進学する傾向が強い。女性は人文社会科学専攻に進学する割合が男性より高く、男性は半数以上が工学専攻に進学し、その人数は女性より遥かに多い。これは高校時の文理選択の影響を受けているとも指摘され、高校時に8割前後の男性が理系に進むのに対し、女性では5割しかいない。また、理系を選択した高校生のうち大学専攻の選択時に四分の一が文系に転向し、そのほとんどは女性であることを指摘した。同じような結果は河野ら（2014）の研究でも見られた。このような選択は、伝統的なジェンダー意識によって分類された男性向けの専攻、女性向けの専攻の影響を受けた結果である（馬 2016）。つまり、数学、物理、化学、生物の理系専攻は、男性的な専攻であるようなステレオタイプは根強く存在し、結果、男性は理系専攻、女性は文学歴史類などの文系専攻に進学する傾向になった（樊 2011）。

先行研究では、子どもの性別役割分業意識は親の意識から影響を受けていることや、役割分業意識の影響で男性は理系、女性は文系を選ぶ傾向にさせ進学選択とキャリアに影響を及ぼしていることがわかった。しかし、高校生の時の文理選択から大学専攻の選択に至るまでの一連の過程で、親と子どもの性別役割分業意識がどのように相互に影響し、その後の進学選択に影響するか、その経過の説明が不足している。また、日本では周囲の意見が女性を文系に方向づける（河野ら 2014）との傾向があった。中国では、女性が文理選択をする際に親からどのような助言をもらい、それが女性の選択にどう影響し、文系に進学に至ったかについて言及した研究が少ない。そこで本研究では、若年女性が進学選択の際に、どのように家族と話し合ったかについてのインタビューデータ

を分析することによって、家族と合意に至るまでの経過を提示する。また、女性の大学進学選択において、特に文理選択また専攻を選択する際にどのように家族の期待と自身の志望とのバランスをとり、家族との合意に至ったのかを検討できると考える。よって、親の性別役割分業意識が女性の進学選択にどのように影響し、進学選択に関する合意形成のプロセスを一層明確化し、理系で学ぶ女性が少ない原因を探るために一助となればと考える。

### 3. 調査方法

収入や居住状態などによるサンプルの多様性を求め、都市規模を考慮し、2015年8月に中国で一級、二級、三級都市である<sup>1</sup>北京、済南、濰坊にわたって、中国人女性（表1. 対象者属性一覧）に半構造化インタビュー調査を行った。本稿では、このデータを用い分析する。

調査内容と調査の方法、倫理的配慮、プライバシーの配慮について、申請書を作成し、筆者が所属する大学の倫理審査委員会に審査してもらった。調査許可を得てから、三都市においてスノーボールサンプリングを行った。知人に最初の協力者を紹介してもらった。SNSやインターネット電話を通じて、事前に調査内容やプライバシーに関する配慮を説明し、更に「調査協力の願い」のメッセージを送った。

現地調査では、協力者にインタビューの場所を指定してもらった。主に自宅、喫茶店でインタビューを行った。承認の書類を交わした後に、フェイスシートを配布し、協力者の属性を把握した。録音の許可を得てからインタビューを開始し、一人に対し約一時間から二時間前後実施した。その際に、同席する家族はいなかった。

テープレコーダーに録音した内容を文字化し、更に和訳した。和訳したデータを第三者に確認し、分析に使用した。分析には佐藤（2009）の継続的比較法の手法を援用した。

調査の対象者の特性としては、全員が「80後」世代の女性であり、進路選択する際に、両親が健在していた。対象者は、全員高校卒業後に、進学の道に進んだ。合計14名の対象者の内、一人っ子は13名であり、1名だけ双子であるためきょうだいがいる。これらの特徴は本研究の目的に相応すると考える。

表1. 対象者属性一覧

	対象者番号	地域	年齢	学歴	高校在籍クラスの文理区分	大学専攻の文理区分
1	1 A	北京	30	大学	文系	文系
2	2 A	北京	34	大学院	理系	文系
3	3 A	北京	30	大学院	文系	文系
4	4 A	北京	30	短大	理系	文系
5	5 A	北京	30	大学	理系	文系
6	1 B	済南	29	大学	理系	文系
7	2 B	済南	30	短大	理系	文系
8	3 B	済南	29	大学	理系	文系
9	4 B	済南	29	大学	文系	文系
10	1 C	濰坊	29	大学	理系	文系
11	2 C	濰坊	29	大学	理系	文系
12	3 C	濰坊	29	大学	文系→理系	文系
13	4 C	濰坊	29	大学	理系	文系
14	5 C	濰坊	28	大学	文系	文系

注：都市規模を基準に、Aは北京、Bは済南、Cは濰坊と表示する。

## 4. 結果

本節では、若年女性が進路選択する際に、性別役割分業意識と家族の影響に関する語りに注目し、分析する。また、家族と当人の意思をどのように調整し、合意達成に至るプロセスの語りを検討していく。

### (1) 学力と性別に基づく選択

近年、政策変更があったが、今回インタビュー調査を受けた若年女性は全て80後生まれであるため、受けた進学政策はほぼ一致すると考える。このような受験制度下で、中国人は教育に対し非常に熱心であり、一人っ子世代の場合では、その関心度が一層増している。親の子どもに対する期待や子どものプレッシャーも大きい（劉2006）。5 Aさんは自分が進学する大学と専攻を選ぶ理由を下記のように語った。

「(前略) (大学を選択した理由は) 当時の成績によるもの。高考の成績は良くなかったので、行きたい大学にいけなかった。(中略) 当時はパソコンや生物専攻を選んだ人が多かった。友達のほとんどもそれらの専攻を選んだ。今の状況から見ると、いい選択とは言えないが、当時は人気の専攻だった。自分の成績では他の専攻は選択できなかった。だから〇〇大という普通の大学を選んだ。また、〇〇専攻は女性向けだから、女性に相応しいと思った。」(5 Aさん) ※ ( ) 内は筆者の加筆である。

ここでわかるのは、対象者5 Aさんが大学を志望する際に、優先的に考えた要素は自分の学力、つまり高考の点数である。この点数は変更不可能なものであり、一定した客観的な外的要素である。そのため、選択する際、最初に以前志望していた大学を諦める選択をした。点数をもとに大学を絞った後、専攻を選んだ。5 Aさんは高校では理系を選んだが、大学に進学する際に文理とも受験可能な金融系の文系専攻に進学した。彼女の専攻には高度な理系の知識が不要であるため、自分への負担も少ないと語った。なぜ5 Aさんは理系から文系に転向することは「よい選択だ」、「自分に相応しい」と納得できたのか。その一因は3 Aさんの語りから説明できる。

「生まれつきの素質だと思う。男は女より理系の神経がある。」「誰かに言われた訳ではないが、クラス全体の成績分布からわかる。自分にとって、文系の勉強は簡単だが、理系は難しい。だから、自分にとって簡単なほうを選ぶのは、自然な流れでしょう。」(3 Aさん)

先行文献で述べたように、女性は文系向き、男性は理系向きという中国のステレオタイプがある。この考えは3 Aさんの語りからも見られた。自分の理系の成績が実際に良いか悪いかにかかわらず、どうせできないだろうという考えが芽生え、進路選択の際に文系へ流れる可能性が大きくなる。これは女性の理系への進学に障害をもたらし、性別が当人の成績や専攻選択に作用していると考えられる。上記で、5 Aさんは女性向けであることを理由に専攻を選択したと述べたが、そこから、若年女性が進学する際の選択行動は現実(取得した点数)に基づいているものの、性別を念頭に置いて進学選択をしていることがわかる。

### (2) 両親の意識に影響される専攻と学校所在地の選択

家族の性別役割分業意識が女性の進学の実選択の中でも、特に専攻と所在地選択への影響が見られた。さらに、それは女性自身の性別役割分業意識と同時に作用していることも見られた。大学と専攻を選択する際に、何に影響されたかについて、2 Cさんと1 Aさんは以下のように語った。

「家から遠く離れたくない、両親に近いところがいい。女性はこの考えを持っている人が多いかもしれない。私もそうだ。」「この専攻を選んだのは、父親のアドバイスがあったからだ、自分は性別によって選択したものではないと思っていたが、入学したら、それが性別によったものだったとわかった。(なぜならこの専攻は) 男性が本当に少ない。女性が多く、男性は数人しかいない。」(2 Cさん)

「この学校に進学した最も大きな理由は、自分が女性であるということにある。父親は家に近い学校を選べと言った。この学校は〇〇市にあるから、実家に近いのである。(中略) 父親は、(私が) 女の子だし、家に近くて生活しやすいところがよいと言った。だから、〇〇市(の学校)を選んだ。」(1 Aさん)

2 Cさんは自分の意思で家族に近い学校を選び、さらに自分の考えは一般的なものであると語る。高校生の時に2 Cさんは理系生であったが、大学に進学する際に文系に転向した。さらに女性が選びがちである専攻に進学した。この過程では家族からの影響も強かったことが彼女の語りの中から読み取れる。同じようなことは1 Aさ

んの語りからも見られた。自分の成績は進学する学校の選択に大きく影響していたと語りつつ、女性であるために特定の専攻にし、父親の意見によって学校の所在地を決めたことがわかった。

第一節と第二節では、語りデータを挙げながら、女性が専攻と学校の所在地を選択する際に、性別と親の意識に影響されるプロセスを確認した。第三節と第四節では、女性が自身と親の考えを調和させていく過程を提示していきたい。

### (3) 合意の過程—自身による選択の委譲

最初3Cさんは進学について、自分自身ですべてを決めたと語った。高校時代に文理を選択した際に、最初に文系を選び、後に理系に変更したことも、すべて自分の意思で選択したと強調する。しかし、話が進むと、父親に常に相談していたことを語り始めた。普段は、多くの事を自分で選択する自由があるが、大学に進学する際の選択は家族の影響が大きかった。さらにその割合を数字で提示してもらおうと、家族が決めた割合は80%であると語った。3Cさんの語りは以下である。

「当時、私より両親の方が大学選択に強い意思を持っていた。その頃は〇(学)校には行かせたくないとか、家族は〇〇社だから〇(学)校に進学すれば将来が保証されると言っていた。一般家庭の女性は将来に安定を求めている。これらの理由から、両親は〇(学)校を選び、最終的な専攻の選択は私に任せた。」(3Cさん)

当初、3Cさんは強い意志を持っていたが、両親に〇校に進学すれば〇〇社への入社がほぼ保障できると説得され、最終的には両親の意見に従った。親が子どもの将来の安定を重視し、将来の保証がある大学に進学させた。3Cさんも家族に説得され、高校では一度文系から理系に転向したが、大学専攻を選択する際に自ら女性の多い言語系の文系専攻に進んだ。ここで自分自身の主張を抑え、両親に譲歩することにより、進学についての合意に至ったことがわかった。一方、3Cさんのような強い意志がなく、最初から自分の将来に明確な目標を持てなかった対象者は、家族の意見に従ったことが見られた。

「当時はお父さんとお母さんに相談した、うちの家族では、大きいことはお父さんに従い、小さいことはお母さんの意見を聞く。(大学進学のような)大きいことはお父さんの意見に従うことにする。」「(前略) 当時は自分でもどの専攻にすればいいのかわからなかったが、〇〇専攻にした。自分に合わないと思ったが、お父さんはいけると言ったので、とりあえず(大学に)入って、卒業できれば何とかかなと思った(後略)。」「(4Bさん)

4Bさんが自身で進学について考えるより、家族の意見に従ったことがわかる。家族の意見について自分自身で検討する過程もあるが、決意するポイントは家族の意見であると言える。この場合も、自身の考えを主張することより、家族に選択権を委譲することを通して合意に至ったと考えられる。

### (4) 合意の過程—自身による選択の主張

最初、両親の意見に反して自分の選択を主張し、自分の考えに従って進学選択をした。後に親の意見を受け入れ、最後に合意に至った過程が見られた。1Cさんは自分の進学について、文系や理系の選択から学校の所在地まで、自分の考えに基づいて選択したと語りつつ、親からのアドバイスについての話をした。

「女の子は文系を選ぶべきだと(両親に)言われた。将来学校の先生になれば安定した生活を送れる。それに、女性は文系が得意な方が良いと(両親から)言われた。しかし、このように言われたからこそどうして女性は文系を選ばないといけないのか疑問に思い、女性だが理系を選んだ。」(1Cさん)

「(前略) 父親の影響で、専攻を選んだ。今は貿易の仕事をしている。貿易だったら、男性も女性もできと思う。(中略) 自分の考えで、女性だから(大学が)家に近いのは良いことだが、地元ではない方が良いと思った。面倒なことが多いのであまり遠すぎても良くない。(このような理由から)その大学を選んだ。」(1Cさん)

1Cさんは親の性別役割分業意識に基づいた意見を全て拒否したと語りつつ、実際は父親からの助言を参考に、専攻について自分の意思を固めたことがわかる。高校時に理系の成績が良かったため、両親の反対を抑え、理系の勉強を続けた。自身の考えを中心に大学を選択し、父親の職業を参考に、大学では文系の専攻に転向した。この場合では、自分の意志を尊重し、自身による選択を主張することで、合意に至ったとわかる。

また女性自身の考えが主導となり、合意に至った場合でも、子どもの頃から親の影響が作用し現在の選択に導かれたケースがある。5Cさんが進学選択について、最初に語ったのは子どもの頃のことであった。

「小さい時から〇〇を習い始めた。小学校〇年生から、個人レッスンを受けていた。その時の親たちは、皆、子どもの趣味を育てることに関心を持っていった。(私の家では)家庭教師まで雇い、趣味や特技のレベルではなく、専門家になるための訓練だった。当時から、自分は将来〇〇になるはずだと思い、〇〇特別クラスに進学した。(自分には)選択の余地がなかった。」(5Cさん)

5Cさんは自分が子どもの頃から〇〇(習い事)について勉強し始めたことを語った後に、〇〇のことは自分自身も好きであると語った。自分が好きであるし、親にも支持されたので、〇〇の勉強は続けられ、大学に進学する際に〇〇の専攻に進学できたと述べた。〇〇の勉強や進学の専攻の選択は全て5Cさんが握っているように見えるが、この自身による選択は、実際子どもの頃から親に身につけさせられた部分もあると考えられる。子どもの頃から学習経験を積み、大学に行く際に、自由のある遠方の大学にこだわったとの語りもあった。進学について、女性が自分自身で全てを決めたように見えるが、子どもの頃から、親の意思の影響が存在し、現在の選択に至ったとも考えられる。したがって5Cさんのように、自分主導で合意に至ったとは言え、子どもの頃から親の影響があったからこそ現在の道に至ったため、親の影響も含めて考える必要性が高いと考えられる。

## 5. 考察と今後の課題

本研究では女性が進学の選択をする際に、家族の意見と自分の意見を調和しながら、合意に至った経過を提示した。それとともに、親のジェンダー規範に基づいた意見にどのように対応し、専攻と学校の所在地を選択したかについても明らかにした。

その結果、女性の進学選択は親の性別役割分業意識に基づいた意見に影響されていることがわかった。(3)の合意の過程—自身による選択権の委譲で示したように、両親の意見は女性の進学選択に強く影響しており、女性自身が選択できる範囲も両親に決められるにもかかわらず、3Cさんのように簡単に自覚できないケースも考えられる。また、(4)合意の過程—自身による選択の主張で述べたように、自分自身の考えを貫いた女性もいる。この場合でも、親の意見を参考にしたと語ったように親からの影響が存在する。

結果を概観するとわかるように、女性は遠方の学校に行かない方が良く、女性向けの専攻を選ぶほうがよいのようなジェンダー規範の影響を受け、学力をもとに進学する学校を選択しているプロセスが見られる。非伝統的な役割分業意識を持っているにもかかわらず、親の伝統的な役割分業意識によって、伝統的な女性規範に従ったような行動をした。大学段階で性別意識が強化される(姜 2009)と言われたが、本研究では意識に変化をもたらしたのは大学の環境や教育だけではないことが明らかになった。いわば高校卒業後と大学進学前の進学選択段階に、親が性別役割分業意識に基づいたアドバイスを押し付けることによって、親の意識の影響を受け、大学の専攻や地域が決められる。そのような過程で選択をすることは、本人が持っている性別役割分業意識に大きな影響を与え、性別規範を強化したのではないかと考えられる。本研究の協力者には高校生の時に理系を選択したのは半数以上(10名)であったが、大学進学を機に10名とも文系に転向した。これは先行研究の女性の進学傾向の結果とほぼ一致する。日本では周囲の意見が女性を文系に方向づける(河野ら 2014)と言われたが、具体的に女性が文理選択の際にどのような助言をもらい、それが女性の選択にどう影響したについて、中国の先行研究ではあまり言及されていない。本研究では転向する際の意味決定の過程を提示することで、家族は将来の仕事念頭に置き、子どもの専攻選択にアドバイスしたことがわかった。教師や会社の経理、会計などのような仕事に就くため、それに対応する専攻に転向させがちである。そして女性はこのような将来像を引き受け、大学の専攻を選択したというプロセスが見えた。進学先を選択する際に起こった一連の家族との交渉行為は、性別役割分業意識の変化を起こしているのではないかと考えられる。理系専攻の将来の収入予期は文系より多い(劉ら 2017)、しかし、多くの女性が文系を選び、文系に転向する。これが男性と女性の収入格差が生じている一因であると考えられる。また、出産期間があるとの理由で就職先に拒まれる(潘 2009)ことによって、女性がさらに低所得層に追い込まれる可能性がある。このような選択は女性のライフコースが構造化され、再生産される要因になっている。さらに、専攻選択は親と相談するなどの相互行為が行われ、親からの影響を受ける。このことから学校では学生本人のジェンダー意識についての教育だけではなく、その背後にいる家族への教育も必要性が高く、その具体的な施策を日中においてさらに検討する必要があると考えられる。

女性が文系の専攻に進学する傾向が強いとの社会現象について、親の性別役割分業意識からの影響がどのように作用したかを追究するため、女性を分析対象者にした。本研究では、都市部の女性データを分析し、農村部の若者の進学選択に触れていなかったため、知見の一般化について検討する必要がある。また、男性の進学選択の過程は女性との相違があると考え、男性の進学選択についてこれも今後の課題として検討する必要性が高いと思われる。

### 【注】

1. 中国国務院は「国務院都市希望区分標準通知」では、常住人口50万人以下を小都市、50万以上100万人以下を中型都市、100万人以上500万人以下を大型都市（300万人から500万人を一型大型都市、100万人から300万人を二型大型都市）、500万人以上1000万人以下を特大都市、1000万人以上は超特大都市と定めた。北京は超特大都市、済南は大型都市一型、濰坊は大型都市二型に当てはまる。また、北京や上海など古くから経済、政治の中心となっている都市を一級都市とし、省の行政府所在地の都市を二級都市、二級都市より経済発展していないが、ある程度経済が発展し人口が多い都市を三級都市とすることは一般常識として認識されている（田 2016）。

### 謝辞

本研究で使用するデータはお茶の水女子大学文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラム平成27年度「学生海外調査研究」の助成金を受け収集した。

### 【参考文献】

#### 【日本語文献】

- 神林博史, 2000, 「性別意識はアスピレーションに影響するか? —高校生女子のアスピレーションの規定因に関する計量的分析—」『理論と方法』15(2): 359-374.
- 河野銀子, 藤田由美子, 2014, 「教育社会とジェンダー」学文社.
- 鹿内啓子, 2013, 「大学生の職業決定と親子関係との関連性についての面接調査」『北星学園文学部北星論集第50巻』(57): 4-2.
- 中村三緒子, 2014, 「女子学生の進路選択に関する考察」『名古屋女子大学 紀要第60号 (人文・社会編)』115-123.
- 長尾由希子, 2008, 「若年男女における性別役割分業意識の変化とその特徴: 高校生のパネル調査から」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ No.12』東京大学社会科学研究所.
- 佐野まゆ, 高田谷久美子, 近藤洋子, 2007, 「大学生における性別志向によるライフコース観の比較」『山梨大学看護学会誌』45-52.
- 佐藤郁哉, 2009, 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.
- T・パーソンズ, RF・ベールズ, 2001, 『家族—核家族と子どもの社会化』橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳, 黎明書房.
- 田姫, 2016, 「中国人女性の性別役割分業意識の変化—若年既婚者へのインタビュー調査から」『21世紀東アジア社会学』8: 138-150.

#### 【中国語文献】

- 胡向明, 2010, 「80后城市独生子女之父母角色替代现象分析」『中国青年研究』9: 68-72.
- 姜方炳, 2007, 「对80后一代角色偏差问题的体认与反思」『中国青年研究』6: 21-25.
- 姜云飞, 2009, 「独立与传统: 80后性别角色的双重标准」『中国青年研究』7: 23-28.
- 刘海峰, 2006, 「高考改革之争」『教育发展研究』Z1: 47-51.
- 刘佳辰, 何章立, 潘昆峰, 2017, 「学生高中到大学文理科专业转换的特征及效果研究」『中国人民大学教育科学』3: 65-180.
- 李华松, 2008, 「改革开放30年对80后特征形成的影响」『中国青年研究』11: 89-91.
- 李明欢, 2004, 「干得好不如嫁的好? 关于当代中国女大学生社会性别观的若干思考」『妇女研究论丛』60(4): 25-30.
- 黄洪基, 邓蕾, 陈宁, 陆焯, 2009, 「关于80后的研究文献综述」『中国青年研究』7: 4-13.
- 马莉萍, 由由, 熊焯, 董璐, 汪梦姗, 寇皖照, 2016, 「大学生专业选择的性别差异—基于全国85所高校的调查研究」『高等教育研究』37(5): 36-42.
- 樊明成, 2011, 「当前我国大学生选择专业的性别差异分析」『现代教育科学』2: 56-60.
- 潘锦棠, 2009, 「促进女性就业的政府责任」『甘肃社会科学』(2): 28-31.
- 王海英, 崔梦舒, 2014, 「个体性别角色形成中的家庭因素的影响研究」『东北师大学报哲学社会科学版』268(2): 171-174.
- 魏永英, 2009, 「“80后”青年的时代特征: 历史社会化的产物」『中国青年研究』7: 14-16.42.
- 徐安琪, 2010, 「家庭性别角色态度: 刻板化倾向的经验分析」『妇女研究论丛』98(2): 18-28.



徐国兴, 2005, 「高中生的大学升学抱负和升学选择」『高等教育研究』10: 43-47.

张艳霞, 2009, 「父母的家庭角色分工与子女的家庭观念-对城市独生子女家庭与非独生子女家庭的比较分析」『郑州大学学报哲学社会科学版第42卷』1: 31-35.

左志香, 2007, 「当代女高中生的性别意识探析-对武汉市400名高中生的调查」『青年研究』9: 15-22.

左霞云, 廉启国, 程艳, 涂晓雯, 王子亮, 余春艳, 楼超, 2013, 「青少年性别角色与性别刻板印象调查」『中国性科学』22(8): 71-75.